

保育者養成における手作り楽器とドラムサークルの可能性

——音楽遊びを創造的に展開する保育者の育成を目指して——

安田 美央

要旨

本稿は、子どもの音楽遊びを創造的に展開する保育者の育成を目指す観点から、手作り楽器とドラムサークルの可能性を探ることを目的とし、2年間のゼミナール活動報告を踏まえて学生の姿や記述をもとに検討する。まず手作り楽器の活動では、素材の特徴と向き合いながら試行錯誤を重ねて音への気づきを生み出すことが重要である。そして、ドラムサークル・ファシリテーションの体験では、表現における音楽的要素の変化を認める声かけや、身体の動きで表現をガイドすることが音を介したコミュニケーションとなりうるという学びにつながった。このように、試行錯誤の機会や、子どもの個性を認める保育者の表現は、子どもの音楽遊びにおける自由な表現を引き出すことを可能にする。

キーワード：手作り楽器, ドラムサークル, 遊び, 保育者養成, 音楽, 即興, 表現, 地域活動

1. はじめに

幼児教育の基本は、環境を通して行う指導と、遊びを通して行う指導である。現行の幼稚園教育要領解説では、音楽に関わる活動で大切なのは、「正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである」¹と示されている。

ここで重要なのは、要領解説でしばしば「自分なり」という文言が用いられていることである。幼児は、感じたことや考えたことを音や動きなどを「自分なりの」方法で表現する。²そして、その自分の素朴な表現が教師や他の幼児から受け止められる体験の中で、表現する喜びを感じ、表現への意欲を高めていく。³つまり、

遊びの中にある音楽的な表現に子どもの個性がどのように発露されているのかを検討し、その個性の発露としての素朴な表現を受け止めようとする姿勢が、保育者に求められているといえよう。

吉永(2006)は、保育の場でマーチング活動を当然行うものと捉えている現状を問題視する。吉永の問いは、大人が求める華やかで完成された表現が、子どもの育ちにつながっているのかという問いであり、幼児が指導者のみに向き合い、その活動には音楽が存在していないように思われる問題や、子ども達の音楽的な成長を深く考えた上で活動を選択する必要があるという問題である。⁴幼児期の音楽的な育ちに必要な活動はどのようなものなのか、子ども達の様

¹ 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』p.240

² 同,p.238

³ 同,p.245

⁴ 吉永早苗(2006)「幼児期のマーチングバンド活動に関する考察—その是非を問う」『音楽教育実践ジャーナル』vol.3 no.2 pp.6-15

子や社会の実情を踏まえて検討し、多様な活動の中からの的確に選択していく大切さは言うまでもない。

また今川(2011)は、音楽と造形の専門家による共同実践を挙げ、子ども達が製作した造形作品を音や音楽を介したコミュニケーションに展開する実践の報告と考察を行っている。ここでは、造形や音を含めた人やモノとの多様な相互作用としての遊びが、子どもの身体感覚や身体反応と深く結びついている姿が紹介されている。この実践は、幼稚園教育要領における領域「表現」が音楽や美術、体育といった教科を合体した概念ではなく、幼児の総合的経験＝遊びに芽生える学びを保育者の側において理解し系統だてる見取りの窓口と捉えていることが前提となっている。⁵領域「表現」を音楽教育の専門家としてどのように捉えるべきかについて、重要な示唆を与えている。

さて、幼児教育や学校教育におけるドラムサークルは、これまで様々に実践が行われ、その効果について検証されてきた。論文として報告されている実践を以下に挙げる。まず、長谷川、三原(2017)は、保育士資格の取得を希望する学生等を対象にファシリテーター養成研修を行い、対象の学生とともに保育園や幼稚園でのドラムサークルの実践を報告している。そこで明らかにされたのは、学生が指導ではなくファシリテーションという立場に関わることで、子どもの感受性や非言語でのコミュニケーションの豊かさに気づく機会となったという効果である。⁶また、両氏(2019)は小中学生の親子

を対象にした公開講座において、楽器の理解のための講義とドラムサークルの講座も実施している。⁷そこで報告されたのは、音や楽器の理解と体験を結びつける講座が、様々な学習意欲へを引き出す可能性である。さらに西田(2012)は、小学生を対象に手作り楽器とドラムサークルを組み合わせた活動の実践を報告し、保護者や子どもの感想を紹介しながら意義を明らかにしている。⁸

筆者はこれらの実践報告を踏まえ即興的な音楽遊びの活動について検討を重ねながら、学生指導や地域活動に生かしてきた。そして、音楽とそれ以外の分野が結びついた幼児期の活動や、保育者養成におけるドラムサークルの可能性をさらに掘り下げる課題を感じている。そこで本稿は、手作り楽器とドラムサークルを結びつけたゼミナール活動の実践を報告する。そして、それを踏まえて子どもが周囲の大人や他の幼児と表現を認め合いながら音楽的な遊びを展開する可能性を探る。子どもの遊びの中で展開される自由な表現を引き出すには、どのような見方や考え方をしていけば良いのだろうか。保育の場にふさわしい音楽表現とはどのようなものなのかについて多角的に考える保育者を育成するために、子どもをあるがままに捉え、子どもの中にある音楽を引き出す活動について、活動実践に見られた学生の姿や記述を元に検討する。

1) 手作り楽器の意義

手作り楽器は、現行の幼稚園教育要領解説で

⁵ 今川恭子(2011)「幼稚園における音楽と造形の共同プロジェクト「身体から始まる表現」」『音楽教育実践ジャーナル』vol.8,no.2 pp.30-37

⁶ 長谷川万由美,三原典子(2017)「幼児教育におけるドラムサークルの効果と課題」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第3号,pp.273-276

⁷ 長谷川万由美,三原典子(2019)「講座『なら

そう!たたこう!世界の楽器』-ドラムサークルをより楽しむための楽器教育の試み」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号,pp.331-335

⁸ 西田治(2012)「附属小学校第4学年におけるドラムサークルの実践-附属小学校,保護者,大学の連携-」『長崎大学教育実践総合センター紀要』,11,pp.247-257

も取り上げられている。そこではいろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶことが内容として掲げられ、例として紙の空き箱をたたいて音を出すことが挙げられている。⁹1つの素材についていろいろな使い方をすることにより、その素材の特性を知り、やがてはそれを生かした使い方に気づいていく。

また、ドイツの音楽教育家であり作曲家であるカール・オルフは、楽器を素材から作ることの意義として、「簡易な楽器を自ら作ることは、音への認識と感覚を深めるためである」といっている。¹⁰子どもは五感を駆使して身の回りのものに関わりながら、音への関心や感覚を育てていくのである。

以上のように、子ども達が楽器を作る過程で試行錯誤を重ねながら、素材に関わる多様な体験を積むことは、子ども達の音色へのこだわりや愛着を引き出すために重要な活動であるといえる。そして、表現の幅を広げ、表現する意欲や想像力を育てるという意味でも非常に有効である。このように、手作り楽器の活動を、音楽の指導における自由な表現を引き出す方法の一つとして捉えている。

2) ドラムサークルとは

ドラムサークルは、グループで即興的に打楽器を叩き、音楽をつくり出す活動で、「ドラム」は世界の打楽器全般を、「サークル」は輪になることを意味する。輪になり打楽器を即興的に鳴らし合うという極めて原始的かつシンプルな音楽的な試みで、近年アメリカを中心に広

まっている能動的集団打楽器演奏活動と定義されている。¹¹ドラムサークルは演奏のスキルや完成度を追い求める演奏スタイルではなく、個々の参加者が自分らしい表現を行い、その集団の調和や一体感を楽しむ目的をもつ。全体が一体になるようにファシリテーターと呼ばれる人が参加者一人ひとりの表現を引き出し、打楽器を輪になって鳴らし、即興的な音楽的コミュニケーションをする試みは、他者との非言語的な関わりを生み出すという特徴を読み取ることができる。

ドラムサークルで主に使用される楽器の種類には、大小異なる様々なタイコ¹²類(ジェンベ、コンガ、フレームドラムなど)やその他の小物楽器(シェイカー、マラカス、クラベスなど)等が挙げられる。その他、バケツや缶を手で叩いたり、台所用品や手作り楽器を用いたりする方法もある。

以上のように、どのような参加者も気軽に楽しめる特徴をもつドラムサークルであるが、それらを円滑に進行する役割をもつのがファシリテーターである。ファシリテーターとは、「物事を容易にする」という意味をもち、すべての参加者ができるだけ簡単に楽しく参加できるようにしながら全体を音楽的成功へと導くことである。¹³ファシリテーターをする人はファシリテーターと呼ばれ、参加者が緊張感やプレッシャーから解放されて気持ちよく楽しめるようにガイドする役割をもつ。表情や体全体の動きで参加者の音色を引き出していき、さらには音の一体感を作り出す。一見、指揮者のよう

⁹ 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』,p.239

¹⁰ 星野圭朗(1979)『オルフ・シュールベルク理論とその実際-日本語を出発点として』全音楽譜出版社,p.50

¹¹ 狩谷美穂(2011)「コミュニティー音楽療法の一環としてのドラムサークル実践の可能性」『広島文化学園大学学芸学部紀要』(1),pp.55-56

¹²本稿では、膜鳴楽器全般を「タイコ」とカタ

カナで表記する。日本では、「太鼓」は和太鼓を連想し、「ドラム」はバンド等で使用されるドラムセットと解釈する方が多いためである。この方針は、佐々木薫(2008)『ファシリテーターの在り方-エンパワーメント・ドラムサークル』株式会社エー・ティー・エヌ,p.12にのっとっている。

¹³ 佐々木薫(2008)『ファシリテーターの在り方-エンパワーメント・ドラムサークル』株式会社エー・ティー・エヌ,p.20

な役割にも見えるが、指揮者とは全く異なる目的をもち、案内人のような役割を果たす。¹⁴

ドラムサークルの目的は、お互いの音を聴き合う活動を通して、お互いに尊重し協調し合うことにある。つまり、練習を重ね、美しく完成度の高い音楽を創り出して聴衆の前で演奏することを目的としない。そこでは参加者全員が一つのコミュニティーとなり、一人一人が他者の音を聴き、互いに音楽的な刺激を受けながら自己表現を行う。さらに、演奏中は聴こえてくる他者の音に調和するか否かは個人の選択に任されるが、調和しないからといって間違っている表現とは捉えず、その時その場でしか出せない表現として大切に受け止める。さらに狩谷(2011)がドラムサークルを個人的な音楽表現を行いながらも集団の中で役割を果たしているという帰属感を感じることを可能にする¹⁵と述べ、障害のある方を対象に活動を展開する可能性を明らかにしているように、バリアフリーな音楽活動という意味で音楽療法の一環としても注目を集めている。

このような特徴をもつドラムサークルをファシリテーターという立場で体験することは、保育者として幼児期の自由な表現を認める姿勢を育成する上で重要な意義をもつといえよう。

2. 実践の概要

1)平成 30 年度ゼミナール活動「オトノワ大作戦！-つくってつくって、ならしてならして-

事例として取り上げる「オトノワ大作戦！-つくってつくって、ならしてならして-」は、平成 30 年度八戸市学生まちづくり助成金を得て、ゼミナール所属学生 11 名が音の遊びのイベントをまちなかで企画・運営したものである。企画を立ち上げることになったきっかけは、八戸

市中心街のまちなか広場「マチニワ」がこの年に建設・運用開始された経緯にある。この施設で何かできないかという筆者の働きかけから、子ども向けイベントを企画・運営することとなった。

①学生による企画・立案

助成金の獲得に向け、学生は幼児の遊びの場の創造にふさわしい目的や内容について話し合い、事業計画を立案した。学生が作成した企画書の一部を以下に示す。

事業の目的

- ・ 幼児の感性を働かせる遊びの場を作る。
- ・ 地域の子ども達の社会性を育む。
- ・ のびのびと自分らしく表現する喜びを子ども達に感じてもらう。

事業の内容

- ・ 手作り楽器や音遊びの研究を行い、地域でのワークショップに活かす。
- ・ マチニワでのイベント「オトノワ大作戦」の実施

期待される効果

- ・ 子ども達の健やかな遊びの場が創造される。
- ・ 子ども達にとって音楽がより身近になる。
- ・ 多くの人がマチニワの魅力を発見・認識する。

八戸市学生まちづくり助成金事業計画書より

そして、文献を読みながら話し合いを重ね、ドラムサークルの内容と、ファシリテーションの方法について理解を深めた。使用した文献

¹⁴ 飯田和子/石川武/菊本るり子/メアリー・クニッシュ(2014)『はじめてのドラムサークル-教師と指導者のための実践ガイド』、音楽之友社、p. 8

¹⁵ 狩谷美穂(2011)「コミュニティー音楽療法の一環としてのドラムサークル実践の可能性」『広島文化学園大学学芸学部紀要』(1),p.57

は『はじめてのドラムサークル教師と指導者のための実践ガイド』¹⁸である。2年生3名は、本著を読み進めながらドラムサークルの理念や、必要とされる技能などについて学びを深めつつ、自分たちの企画で大切にしたいことについて話し合いを重ねた。話し合いでは参考図書に示された活動実践¹⁹に注目し、本格的な楽器がない状況で、手作り楽器や台所用品を用いることも可能だということに気づき、企画に取り入れることとした。

また、この年に建設・使用開始された八戸市中心街のまちなか広場「マチニワ」の活用を目指すワークショップに参加し、企画を掘り下げていった。さらに、八戸市中心街で行われた子ども向けイベントに参加することで、イベント運営において留意したいことについて検討した。

これらの活動を元に、宣伝リーフレットの作成にあたり、地域子ども達や保護者の方々に向けてのメッセージを話し合った。その結果、本イベントに参加した親子が、家庭に帰っても手軽に音の遊びを楽しんでもらうため、材料は身近にあるものを用いることにした。さらに、この活動の意義をわかりやすく伝え、子ども達だけでなく保護者の方にとっても楽しい企画を目指すことが大切だと考えた。

おともだちのみなさんへ。こんにちは、はじめまして。がっきをつくったり、おとをならしたりしてみんなでいっしょにたのしくあそぶよ。おにいさん、おねえさんがみんなであってるよ～!!

「オトノワ大作戦! つくってつくって、ならしてならして」
宣伝リーフレットより

私たちは、「子ども達の幼児期にふさわしい表現を引き出したい」「のびのびと表現する喜びを感じてもらいたい」という想いで活動しています。新しくできた「マチニワ」で、子ども達の健やかな遊びの場を企画いたしましたので、ぜひお子様と一緒にお願いします。今回は、ゲストに三原典子さんをお迎えして、ドラムサークルと手作り楽器をコラボします。保護者の方々も一緒に楽しんでいただけると幸いです。

「オトノワ大作戦! つくってつくって、ならしてならして」
宣伝リーフレットより

2年生3名が話し合いを重ねた結果、安全な環境で安心して遊べる場づくりを目指すことや、子ども達の表現をよりのびのびと引き出すことを目標にした。

②手作り楽器の検討

保育の場で手作り楽器の活動をするとき、その飾り付けや見た目などに力を注ぐという声は少なくない。しかし、そのことに疑問を感じた学生(平成30年度2年生3名)は、手作り楽器で大切なのは、その成果物ではなく、素材の特徴を捉えることや、音色をよく聴いて吟味することだと楽器の作り方の検討を通じて考えた。そこで、材料を多くの中から選択できるように環境設定する工夫を考案した。

活動では、振って音のなるシェイカーを主とした。中に入れる材料は、豆類3種(大豆、小豆、黒豆)、米、マカロニ5種(形や大きさの異なるもの)、ビーズ(プラスチックや木)、貝殻、鈴(大、中、小)、クリップなど、活動できる広さに応じて材料を用意した。

¹⁸ 飯田/石川/菊本/メアリー・クニッシュ＝(2014), 音楽之友社

¹⁹ 同,p.30



写真1：手作り楽器の素材



写真2：トイカプセルのシェイカー

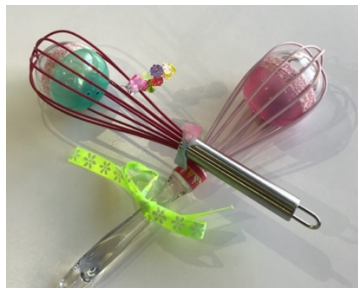


写真3：泡立て器のシェイカー



写真4：トイレットペーパーの芯で作るシェイカー

例えば鈴と豆と一緒にヤクルトの容器に入れてみるといったように中身の素材を組み合

わせたり、ヤクルトの容器からトイレットペーパーの芯に変えてみたりなど、音を聴きながら容器と中身の相性を自分なりに工夫しながら試行錯誤を繰り返す過程が大事なのだと学生は徐々に気づいていく。その気づきから、音をよく聴きながら素材を選ぶように子ども達に声をかけていた。

そして、でき上がった手作り楽器で音を鳴らす活動により多くの時間をかけるため、短時間で完成できるものを作ることにした。目安として制作時間は 15～25 分ほど、手作り楽器を鳴らす活動は 25～40 分ほどとした。子ども達が音色への愛着をさらに深められるのを目指し、様々な気づきが生まれるのを強く意識しながら計画を立案した。それは、他者が作った楽器と自分の作った楽器との音色の違いや、同じ楽器でも鳴らし方で音色が異なるという気づきである。また、複数の楽器を組み合わせる簡単な即興アンサンブルを実施しながら、素材によって楽器の音色が異なることを実感していた。

③ドラムサークル・ファシリテーションの体験

マチニワでのイベント当日はゲストのファシリテーターに三原典子氏を迎えて、その日に子ども達が自ら作った楽器を鳴らして遊んだ。2年生の学生3名はファシリテートを体験した。

三原氏によるファシリテートより始まり、鳴らすリズムを参加者全員で模倣した。「お好きにどうぞ。」の合図で、速いテンポで自由に鳴らした後、ゆったりとした雰囲気から、徐々に速さを増した。速さの変化に合わせて、身体の揺れる子どももいた。三原氏が拍の流れに合わせて腕を大きく回すと、その動きに同調するように、参加者の自由に叩く音の拍感も統一されていくように感じられた。

その後、学生によるファシリテートを開始する。1人目の学生は、中央に立ち「1, 2, お好き

安田美央：保育者養成における手作り楽器とドラムサークルの可能性
——音楽遊びを創造的に展開する保育者の育成を目指して——

にどうぞ。」と掛け声の合図を出した。すると、参加者は一斉に思い思いのリズムで自由に鳴らし始めた。次に、拍節のない表現で手のひらを上に向けたり下に下ろしたりして、強弱の変化を身体の動きで表現すると、参加者もその合図に合わせて身体を揺らしたり、音色に強弱の変化をつけたりした。2人目の学生は、「1,2, お好きにどうぞ。」で全体が自由に鳴らした後、「1,2,3,4,ストップ。」の掛け声で静寂をつくりだす。腕を高く挙げ、身体を大きく広げると音色は力強さを増し、しゃがんで手を横に広げると、音が小さくなった。合図を出しながらも身体を回転させ、参加者全体の表情を見渡していた。「まねしてください。」の掛け声の後、いくつかのリズムを示し、参加者はそれを模倣した。3人目は、円の中央に立つ前に戸惑う姿が一瞬見られたが、三原氏の励ましの後で円の中央に立つと、堂々と合図を出した。合図の通りに止まったときに、参加者全体を見渡して「素敵です。」と声をかけた。参加者全員の表情を見渡しながら、単純なリズムと複雑なリズムを交互に鳴らし、リズムを模倣する合図を出し、参加者もそれに応じた。

再び三原氏が中央に立ち、拍節のない表現から、一斉に鳴らす音の数を増やしていく。ファシリテーターが不在になった後も、拍の流れに合わせた自由な演奏は続いた。

再び学生によるファシリテーターが始まる。拍節なく強弱の変化をつける合図を出した後、リズムを示すと、参加者はそれを模倣した。そして、身体を大きく広げたり、小さく縮めたりして強弱の変化をつける合図を出した。

三原氏が一人の子どもを円の中央に招き入れると、その子どもはリズムを示し、参加者が模倣する。一人終わるごとに全体に拍手を求め、褒め称えた。その後、「次にやってくれる人はいるかな。」と三原氏が呼びかけると、次から次へと、子どもが手を挙げて立候補し、8人の子どもが順番に円の中央に立ち、リズムを示し、それを参加者が模倣した。

三原氏は最後に、「今日やったことは、リズムで会話をしたんだよ。」と全体に声がけした。学生は、この日の活動を以下のように振り返った。

ならず活動では2年生が三原先生に協力していただきファシリテーターに挑戦しました。実際にやってみて思ったように動けない事もありましたが参加して下さった方々が優しく受け止めてくださり最後までやり遂げる事ができました。

平成30年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

2)令和元年度ゼミナール活動「オトノワ大作戦！-タイコのリズムで心がはじける-」

令和元年度は、八戸学院幼稚園、八戸学院聖アンナ幼稚園、八戸学院第二しのめ幼稚園の協力を得て、タイコ類やシェイカーなどの楽器を充実させて活動を行った。



写真5：ドラムサークルの楽器配置

7月～11月にかけて、5回の活動を行ったうち、ここでは11月に八戸学院幼稚園で15名の預かり保育の幼児を対象にドラムサークルを実施した活動に注目する。

①準備：環境構成とファシリテートの確認

はじめに、学生と筆者とで環境構成をした。タイコ、果物や野菜の形をしたシェイカー、サウンドシェイプスなどを円形に並べた椅子に

配置した。学生達には、楽器の種類や奏法に応じて音色が異なることを子ども達にも気づいてもらうための環境構成を工夫する姿が見られた。

振る楽器・叩く楽器が被らないよう各椅子の下に 2 種類の楽器を置き、鳴らして遊びました。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

次に、以下のファシリテーション・キュー(合図)²⁰を確認した。

・ランブル

叩く速さに制限はなく、参加者は自由に両手で連続的に叩く。手を上下に運動させる。

・ストップ

演奏を止める。手を頭上から横に大きく交差させる。

・スタート

「お好きにどうぞ。」と拍に乗った言葉のリズムに気をつけて合図する。

・ボリュームアップ・ダウン

「大きくどうぞ。」や「小さくどうぞ。」というスタートの合図で始め、音の強弱を表す。徐々に強くしたり小さくするには、身体を大きく広げたり縮めたりする。強い音を誘うときは、手の平を上に向けて手を頭上にあげる。弱い音を誘うときは手のひらを下に向けて身体を縮める。

・模倣

「まねっこしてね。」と拍に乗って合図した後、リズムを提示する。

・アテンション・キュー

自分がファシリテーターであることを認識してもらうための、初対面の参加者への最初のアプローチ。安心して表現できる場であるこ

とと、「よろしくお願いします。」や「一緒に楽しみましょう。」の気持ちを伝える。参加者全員目を見て、注目を集める。

「今回のタイコ遊びの活動はどのような雰囲気にしていいか。」と筆者が問いかけると、「盛り上がる感じ。」「楽しい雰囲気。」と学生が答えた。「顔の表情も、そのイメージに合うようにしよう。」と声をかけると、緊張した面持ちの学生達も、笑顔を心がけるようになった。

筆者が幼児を呼ぶために退室すると、学生達は、どのような順番でファシリテーターを務めるか、どのようなリズムを打とうか、どんな表情で迎えるかなど打ち合わせを始めた。

②活動の様子：学生によるファシリテーションと子どもの表現

間もなくして、筆者に案内された子ども達がタイコを叩く学生達の姿を室外から窓越しに覗いた。すると学生達は楽しい雰囲気や明るい表情を心がけ、決まったリズムはなく自由な表現で楽器を鳴らす姿を窓越しに子ども達に見せた。筆者が子ども達と共に入室し、演奏を止め、好きな楽器を選んで座るように子ども達に声をかけると、子ども達は思い思いに試し打ちをしながら楽器を選択していく。野菜の形をしたシェイカーを鳴らして「なにこれー。」と声をあげる子どももいれば、タイコを手のひらで叩いて音色を確かめる子どももいた。

楽器類の奏法を紹介すると、子ども達は思い思いに楽器を鳴らした。筆者が「お好きにどうぞ。」と合図をすると、周りの音を聴かずに大きな音で拍感なく叩いた。学生の自己紹介を交えながら、拍節のない表現(ランブル)とストップの合図を繰り返すと、徐々に合図に注目するようになった。拍節のない合図と拍節のある表現、強弱の変化の合図などを交互に繰り返していくうち、思い思いにならしていた子ども達

²⁰ 飯田和子/石川武/菊本るり子/メアリー・クニッシュ(2014)『はじめてのドラムサーク

ル-教師と指導者のための実践ガイド』音楽之友社,pp.10-15

の中に、拍に乗りながら叩く姿が増えたり減ったりした。

拍感が統一され全体が調和し始めたところで、学生によるファシリテーションを開始した。1人目の学生は、足踏みをして拍を示したあと、足踏みで徐々に速くし、拍節のない表現(ランブル)に変化させた後、両腕を大きく交差させてストップした。2人目は、「まねっこしてね。」と合図した後にリズムを示し、単純なリズムから少しずつ複雑なリズムへと展開した。示されたリズムと同じように鳴らす子どももいれば、異なるリズムを鳴らす子どももいた。「お好きにどうぞ。」と合図をすると、拍感のない表現をする子どもが数名いたが、拍に乗った身体の動きを伴いながら表現する子どもが多い。3人目の学生は、「大きくどうぞ。」と合図を出し、両腕を頭上にあげた。すると、拍感のないリズムで自由に叩いていたある子どもは、学生が拍に合わせて首を上下する動きに合わせて大きな音で叩き始めた。「1, 2, 3, 4, ストップ。」の後「小さくどうぞ。」と声をあげると、子ども達は身体を縮ませながら楽器を鳴らした。中央に立つ学生はその身体の動きの変化に同調するように、身体を縮めた。タイコの鼓面ではなく、側面の方が小さな音がすると気づき、タイコのいろいろな場所を手のひらや指先で叩いて音色を確かめる子どもの姿があった。「お好きにどうぞ。」と合図をした後は、お互いの叩く姿を見ながら、リズムを同調させる子どもや、音を大きくしたり小さくさせたりと強弱を変化させようとする子ども、鼓面を手のひらでこすって音を出す子どももいた。それぞれ思い思いのリズムではあったが、この瞬間、お互いの表現に目や耳を向ける子どもが増え、全体の調和を学生が感じたように見えた。4人目の学生は、「まねっこしてね。」と模倣の合図を出した。2人目の学生と同様、はじめは単純なリズムか

ら、徐々に複雑なリズムへと発展させるが、子ども達の叩くリズムが自分と異なる時にはもう一度同じリズムを繰り返したり、単純なリズムを再び示したりと、子どもの様子を見ながらリズムを工夫した。

「お好きにどうぞ。」の合図の後、ある子どもが学生に対し、「これ、面白い音がするよ。」と話しかけながらマンゴーの形をしたシェイカーの音色をアピールしていた。筆者が輪の中央に立ち、ストップの合図を出した後、その子どものシェイカーの音色が残った。この子どもは、合図に出遅れたか、故意に静寂の中で自分の音色を目立たせようとしたのかはこの場ではわからなかったが、合図に合わない表現をしていたことは確かである。しかし、ドラムサークルでは「間違い」という概念はない。どんな演奏も全て、大切な「その時その人にしか出せない」音なので、尊重して大切に扱う。²¹ほかの場面では失敗と受け取られるような音や動作も、新しいアイデアとして全体の表現に活かしていく。筆者はその考えから、全員でシェイカーをもち、一人の子どもがシェイカーで鳴らすリズムを全員で模倣するというのを、全員の子どものリズムを示させて繰り返した。

筆者のファシリテートにより全体を演奏するパートと演奏しないパートに分けて聴き合った後、再び、学生のファシリテーションを開始した。どの学生も、前半よりも緊張が解け、子ども全員の表情を笑顔で見渡していた。1人目の学生は、模倣の合図から、拍節のない表現の合図を3回繰り返してストップした。2人目の学生は、模倣を複数回繰り返した。前半の時に示したリズムよりも単純に、子どもが模倣しやすいリズムを心がけているように見受けられた。3人目の学生は、「大きくどうぞ。」と合図をして始めた後、身体を広げたり縮めたりして強弱を表現した。前半よりも身体の動き

²¹ 飯田和子/石川武/菊本るり子/メアリー・クニッシュ(2014)『はじめてのドラムサーク

ル—教師と指導者のための実践ガイド』音楽之友社,p.9

が大きくなり、わかりやすい身体表現をしようとする気持ちが読み取れた。4人目は、拍節のない表現の合図から、「まねっこしてね。」の声がけの後、強弱の変化や音色の変化も織り交ぜながら、様々なリズムを示した。

活動の終盤は、深呼吸をしたり波の音を味わったりとクールダウンをした後、学生がそれぞれ子ども達全体に向けて挨拶の言葉をかけた。「今日楽しかったおともだちー。」と呼びかけると、子ども達は拍手を表現するように、楽器を思い思いに鳴らした。他にも、「今日はみんなと一緒に楽器を叩いて楽しかったです。」、「いろいろな楽器の音を聴かせてくれてありがとう。面白い音がたくさん楽しかったです。」と学生から子ども達に言葉がかけられた。

3. 実践から見えてきた成果と課題

1) 音色への気づきや愛着を育む手作り楽器

幼児を対象とした手作り楽器の指導で大切なのは、素材の組み合わせや素材の扱い方によって、音色が変化するという気づきを生み出すことである。手作り楽器の活動では、学生達は「よく聴いてね。」「いい音だね。」など、子ども達が音を聴きながら楽器を作れるように声をかけていた。その言葉がけを何度も重ねることを通して、子ども達が作りたい音色を学生自身も味わい、その音色の良さを認めながら支援しようという気持ちが感じられた。

手作り楽器の魅力は工作としての過程だけではなく、その過程で変化していきながら完成していく楽器の音色である。学生は、その気づきを以下のように振り返った。

「材料が身近にある」「子供たちの安全を守る」「自発的に活動しようとする姿、意見を尊重しさまざまな音を経験させる」ということを大切にしました。

平成30年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

活動では、子ども達自身が容器や中身を選んで自分のお気に入りの音が見つかるまで何度も試行錯誤を繰り返し、完成させようとする姿が見られた。

平成30年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

学生は、子ども達が自分たちの作る楽器の音色を何度も試しながら工作する過程を「お気に入りの音を探す」と表現した。平成30年度の活動では、様々な楽器の音色を体験しつつ、試行錯誤を重ねて楽器を作る過程が、子ども達が音色への愛着を育てている姿へとつながる実感があった。

さらに、令和元年度の活動では、試行錯誤を重ねる環境構成への意識がさらに深まった。

課題として気をつけた点は、子ども達が楽器の音色を聴くことに集中して、子ども一人一人が主体となりじっくりと試行錯誤が出来る環境づくりでした。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

この課題意識の発端には、親子イベントの中で保護者が「この音の方がいいよ。」「これとこれを組み合わせさせてごらん。」など、子どもが素材の組み合わせを試すのを待てずに声かけをした姿への疑問にあった。それはつまり、大人用の用意した筋書きに子どもが従うように見え、子どもは試行錯誤をしていないのではないかとこの疑問である。この学生は、大人の求める表現に子ども達の表現を近づけようとすることはせず、教えずに気づきを待つことが大切だということをドラムサークルから学んでいた。そして、子どもの遊びの中で音楽表現を引き出すには、子ども一人ひとりがどう表現したいのかをじっくりと見守りつつ、その表現の変化を認める声かけが大切だということを実感していたのである。

2) 音や音楽の自由な表現を引き出すドラムサークル

学生にとって、即興的な音楽表現は難しく感じられているようだ。簡単な打楽器を用いて即興といっても何をすれば良いかといった反応など、はじめは戸惑う姿が多かった。そこには、正解を強く求めようとするあまり、自由な表現に抵抗があるという心理が働いているように見受けられた。そういった姿が見られたときには、いったんリズムを楽譜に表すなどして、自分の表すリズムを視覚で理解できるように支援した。視覚的にリズムパターンを積み重ねていき、はじめはA,B,Cしかなかったパターンを,D,E,F,と増やしていく。3択から1つのリズムを選ぶことから6択から1つのリズムを選ぶことに発展できればそれは立派な即興だと声をかけた。失敗と自分が感じたとしても、その表現さえも面白さや多様性として認める観点が大切なので、失敗を恐れる必要はないと何度も伝えた。だが状況に応じてリズムを作り出す演奏よりも、事前に筋書きが用意された予定調和の演奏の方が、学生にとって安心するように見受けられた。

しかしながら活動実践を積むうち、学生は自分たちよりも、子ども達の方が柔軟で、自由な表現への抵抗がないことを感じていった。その姿に伝えるように。子どもの出すリズムに応じて即興的に表現する姿が徐々に増えていった。また、模倣の合図を出す際には、どのようなリズムが子ども達にとって模倣しやすいか試しつつ、単純なリズムから複雑なリズムへと展開させた。さらに、「お好きにどうぞ。」という合図で全員で鳴らす場面では、会話をするように、子どもの出すリズムを繰り返したり、そこから少しだけ表現を変えて応えたりしていた。

ドラムサークル・ファシリテーションでは、子どもがその時叩いている自然で自由な表現を大切にしつつ、全体が望ましい方向へ向かえるように輪の中心で合図を選択していく。そのために心がけるポイントに、教えずに気づきを待つという点や、個性を引き出しながら調和へ導くという点²²がある。子ども達が「指導された」という感覚をもたずに、しかし結果として参加者全員にとって望ましい方向に導いていくのである。平成30年度の実践では、学生は参加者全員の姿を見渡し、「素敵です。」「いいねえ。」など、笑顔で表現を認める声かけをするように心がけていた。声かけや表情は子どもの表現を認める上でとても重要であり、どんな表現も認める姿勢が個性を引き出すということを実感する機会となった。さらに令和元年度の実践では、学生が拍感を示して「お好きにどうぞ。」と合図をしても、子ども達は思い思いに楽器を鳴らし、周りの音を聴かずに大きな音で拍感なく叩いた場面が何度もあった。そのような場面では、拍節のない表現(ランブル)とストップの合図を繰り返した。拍感のあるリズムと拍感のないリズムを意図的に交互に繰り返すことで、子ども達は拍感の有無によってリズムの一体感が異なることに気づき、周りの音をよく聴くようになっていった。そこでは正しい拍感を指導するのではなく、拍感に気づくように様々な合図を組み合わせながら気づきを導いていくことを目指していたのである。

さて、自由な表現で音を鳴らしたり聴きあったりする活動は、それぞれの子どもが心地よいと感じるレベルとペースでコミュニケーションする機会となるという意味で、音を介したコミュニケーションと言い換えることができる。つまり、簡単な音楽あそびをすることは、音楽ということばを用いた会話をする経験²³にも

²² 飯田和子/石川武/菊本るり子/メアリー・クニッシュ=共著(2014)『はじめてのドラムサークル-教師と指導者のための実践ガイド』音楽之友社,pp.8-9

²³ イレーネ・ストリータ,稲田雅美(訳),石原興子(訳)(2005)『子どもとつくる音楽-発達支援の音楽療法入門』クリエイツかもがわ,p.17

なりうるのである。そして、子どものレベルに応じてコミュニケーション能力をのばし、人と交流することを練習するのに有効な手段となる²⁴といえよう。ある学生は、以下のように振り返る。

音を介したコミュニケーションに大切なことがわかった。

音色には、強弱・長短だけでなくさまざまな種類があり、その変化を感じ取ることが大切だと思いました。例えば、声でリズム遊びをする子どもの声の張り方や声の高さが変化したときにその表現を見つけて認めてあげることなどがあげられます。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

この記述で認められる気づきは、即興的な音楽アンサンブルを表現する際の音楽の要素の変化に着目することの大切さである。つまり、速さや強弱、音色などのシンプルな変化が、子ども同士や周囲の大人との伝え合いを生み出すというのだ。さらに、そのような音楽の要素の変化を受け止めている子どもの様子にも着目していた。

子ども達との活動では、音の速さの変化や、強弱の変化を打楽器で遊べるように工夫しました。音楽の要素が変化することは、不思議で面白いことなので、子ども達は笑っていました。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

以上のように、子どもの自由な表現を引き出すために大切なのは、子どもの音への気づきや

表現の変化を認めながら活動を展開していくことである。表現の変化を認めるには、強弱や長短といった音楽の要素の理解が不可欠で、そういった音楽の要素は身体の動きと密接に関係している。例えば楽器を鳴らす子どもの身体は、強く大きな音を鳴らす時には大きく動き、静かな音を鳴らす時には縮める動きを伴う。また、中央に立つ学生の足踏みが速くなると楽器の音も速く鳴った。これらの合図をわかりやすく示すことの大切さを学生は感じていた。

身体の動きは、小さい表現だと相手には伝わりにくいものです。なので、大きな表現で相手に伝わるように動くことが大切だと思いました。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

ファシリテーションを体験して、初めは戸惑いや緊張もありましたが、回数を重ねると緊張もほどけていきました。合図に合わせて音が動く面白さを体感する事が出来ました。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

ドラムサークル・ファシリテーションを学生が体験することは、音楽の諸要素の変化は身体の動きでも表現できることへの気づきと実感を生み出した。

このように、子ども達の自由な表現を引き出すには、言葉がけや表情がとても重要であり、音楽的な変化は身体表現で表現することもできる。そして、即興的な楽器遊びの活動では、子ども達の表現一つひとつを認め表現を引き出すというスタンスで、音色やリズムの個性を全体の調和へと導いていくことが大切である。ドラムサークルのファシリテーション体験が

²⁴イレーネ・ストリータ、稲田雅美(訳)、石原興子(訳)(2005)『子どもとつくる音楽-発達支援

の音楽療法入門』クリエイツかもがわ,p.11

これらの実感を得るにあたって大きな効果を期待できるといえよう。

3) 音楽の遊びを多角的に考える機会としてのイベント企画・運営

学生がイベントを企画運営することにより、音楽の遊びで何が大切かについてそれぞれが自らの考えを深める機会を得ることができた。活動の目的を自ら考えることは、活動を終えた時の振り返りの道標となり、「できた／できなかった」「楽しかった／つまらなかった」などといった二項対立的な考察ではなく、活動の意義について実感できたといえる。

手作り楽器を使ったドラムサークルは一人ひとりの良さを発揮できる場となったと感じられた。それは、それぞれの手作り楽器が違う音色を奏でていて、子供たちがその違いを楽しむことができたからだと考えている。また子ども一人ひとりが自分から表現しようとする姿も印象的だった。それにより一体感も生まれ、参加者の表情も明るいように思えた。子ども達だけでなく、大人の方でも楽しむ事ができる企画にする事ができたと思う。

平成30年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

学生の活動が、中心街の活性化に寄与したという実感は、活動実施にあたって協力して下さった八戸市の職員の方々からの学生への声かけによるものである。

子ども達がいきいきと遊ぶ姿がまちの活気を生み出した。

平成30年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

さらに、本イベント企画を経験した学生は、

地域で行われるイベントの趣旨や企画運営の想いに着目するようになる。以下は、令和元年10月に、特定非営利活動法人子育て支援ネットゆりかご主催の「ママ・パパフェスタ2019」における手作り楽器の体験コーナーを運営した際の動機である。

今回の活動場所は三戸です。なぜ、三戸にしたのかというと「地域のみんなで子育て支援を」といったメッセージに興味をもったからです。

令和元年度ゼミナール活動報告集『摂理と輝石』より

学生が自ら企画運営するという体験により、保育施設以外での子育て支援について関心を広げることができた。子どもの育ちに必要な音楽の遊びについて多角的に考えるには、子ども達の様子や社会の実情を踏まえて検討する広い視野が不可欠なのである。

4. まとめ

学生たちの振り返りからは、子どもが周囲の大人や他の幼児と表現を認め合いながら音楽的な遊びを展開することの大切さを実感していることが読み取れた。また、イベント企画を通じて地域での子育て支援に関心を広げながら、その実感を確認なものにしようという意識も読み取れた。

手作り楽器については、学生は当初は見栄えのする完成品に気持ちが行きがちではあったものの、活動を重ねるにつれ、徐々に音をじっくり聴くことの意義を捉えていった。そして、自分の作った音色に愛着をもち、その音色でどう表現していこうか試行錯誤することが、遊びの本質を探る手掛かりになった。子どもの創造性を育むには、試行錯誤の過程が大切であることは言うまでもない。特に、素材の選択肢を増やすなど工夫を凝らすことで子どもの試行錯誤の機会を保証することにより、子どもの創

造性を育んでいくことの可能性を本実践で実感することができた。

楽器の表現は、発表会などの披露に向けて完成させる目的のものもあるが、遊びの一種として完成を目指さない素朴な表現も、幼児期の子どもの音楽表現として大切な活動である。本実践を通じ、音を介したコミュニケーションや、音色を探る試行錯誤の機会が子どもの音楽表現への想いや個性を引き出す可能性を実感できた。

その一方で、子どもの遊びの中の自由な音楽表現を引き出すことを目指す見方や考え方や、遊びの中に見られる音楽表現に発露する子どもの個性の捉え方については、まだまだ検討の余地が多く残されている。それは、幼児期における育ちに必要な音楽活動について検討するための、子どもの発達と照らし合わせながら遊びの本質を深く掘り下げる視点である。さらには、遊びとしての音楽表現を創造的に展開して子どもの育ちにつなげていくには、音楽的に発露される子どもの個性を認めながら遊びを経験として捉えるための、分析的な視点も必要になってくるだろう。

ドラムサークルは、参加者一人ひとりの表現を引き出すことを目的とし、指導者ではなく案内人というスタンスで音の遊びを展開していく。子どもをあるがままに捉え、子どもの中にある音楽を引き出し、それを保育の中の音楽活動や環境構成に生かそうとする姿勢を培うために重要な示唆を与えている。

謝辞

- 1) 手作り楽器とドラムサークルの実践及び本稿執筆にあたりドラムサークルファシリテーター協会理事の三原典子氏の助言と協力をいただいたことに、心より感謝申し上げます。
- 2) 平成 30 年度学生まちづくり助成金交付事業「オトノワ大作戦！つくってつくって、ならしてならして」イベント運営にご協力いただきました八戸市、八戸菓子商工組合、こどもはっ

ち、八戸学院地域連携センターの関係者の方々に心より感謝申し上げます。

3) 活動の場を提供してくださった幼保連携型認定こども園八戸学院幼稚園、八戸学院聖アンナ幼稚園、八戸学院第二しのめ幼稚園、こどもはっち、八戸市、特定非営利活動法人子育て支援ネットゆりかごの関係者の方々のご協力を心より感謝申し上げます。

4) 学生指導にあたり、ドラムサークルファシリテーター協会および日本オルフ音楽研究会の研修会等への参加による研鑽の成果が大きい。関係者の方々に心より感謝いたします。

5) 本稿執筆にあたり助力をいただいた横浜国立大学教育学部小川昌文教授、本学学長杉山幸子教授に心より感謝申し上げます。

付記

- 1) 平成 30 年度のゼミナール活動は、八戸市学生まちづくり助成金の交付を得て実施した。
- 2) 令和元年度のゼミナール活動は、八戸学院イノベーション基金の助成を受け実施した。
- 3) 本稿は、日本音楽教育学会倫理綱領作成委員会編(2014)『音楽教育学第 44 巻第 1 号別冊・音楽教育にかかわる人の倫理ガイドブック-研究と実践に向き合うために-』にのっとって倫理的に配慮した。学生に対しては、活動の記録が研究活動に活用される旨を所属学生に説明し、本人の了承が口頭で得られたデータに限り、匿名で掲載した。

参考文献

- 1) 吉永早苗(2006)「幼児期のマーチングバンド活動に関する考察-その是非を問う」『音楽教育実践ジャーナル』 vol.3 no.2 pp.6-15
- 2) 今川恭子(2011)「幼稚園における音楽と造形の共同プロジェクト「身体から始まる表現」」『音楽教育実践ジャーナル』 vol.8,no.2 pp.30-37
- 3) 長谷川万由美、三原典子(2017)「幼児教育に

におけるドラムサークルの効果と課題」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第3号,pp,273-276

4)長谷川万由美,三原典子(2019)「講座『ならそう！たたこう！世界の楽器』-ドラムサークルをより楽しむための楽器教育の試み」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号,pp.331-335

5)西田治(2012)「附属小学校第4学年におけるドラムサークルの実践-附属小学校,保護者,大学の連携-」『長崎大学教育実践総合センター紀要』,11,pp.247-257

6)日本オルフ音楽教育研究会(2015)『オルフ・シュールヴェルクの研究と実践』朝日出版社

7)星野圭朗(1979)『オルフ・シュールベルク理論とその実際-日本語を出発点として』,全音楽譜出版社

8)飯田和子/石川武/菊本るり子/メアリー・クニッシュ=共著(2014)『はじめてのドラムサークル-教師と指導者のための実践ガイド』音楽之友社

9)佐々木薫(2008)『ファシリテーターの在り方-エンパワーメント・ドラムサークル』株式会社エー・ティー・エヌ

10)狩谷美穂(2011)「コミュニティ音楽療法の一環としてのドラムサークル実践の可能性」『広島文化学園大学学芸学部紀要』(1),pp.53-62

11)イレーネ・ストリータ,稲田雅美(訳),石原興子(訳)『子どもとつくる音楽-発達支援の音楽療法入門』クリエイツかもがわ

12)村上玲子,櫻井琴音,上谷裕子,早川純子,大津山姿子,津山美紀(2015)『アクティブラーニングを取り入れた子どもの発達と音楽表現-幼稚園・保育士養成課程』

13)文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』

執筆者紹介(所属)

安田 美央 八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 講師